

杉浦正一郎著 『芭蕉研究』

大内, 初夫
鹿児島大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12349>

出版情報 : 語文研究. 8, pp.32-35, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

杉浦正一郎著『芭蕉研究』

大内初夫

杉浦教授が亡くなられて一年有半の月日が早くも流れたが、やうやく此頃教授の最初の論文集『芭蕉研究』が岩波書店より刊行された。本書はその後記によると、著者が東大に提出して文学博士を授けられた論文「芭蕉研究」の中から、成城大学の板坂元氏が重複論文、未完論文を除いて取捨選択し、整理されたものである。著者は死殞の前の夏休み、毎日あの暑い研究室に出られて論文集の補綴加筆の仕事に当られ、それが著者の死期を早めたと思はれるだけに、筆者はこの落着いた装釘のA5版五百頁に及ぶ立派な書物を手にして、全く云ひしれぬ感慨に襲はれたのであった。

長い問答譜史の研究に携はつてゐられた著者に、これ迄まともな論文集がなかつた。本書の中村教授の跋文によると、数度論文集を出す話もあつたらしいが、結局いろいろの事情で果されなかつたらしい。筆者がお伺ひしたところでも、昭和二十三年、東京の某書肆より著者の主論文を集めた『俳諧研究』なる一書が出版されることになり、校了までしながらも、書肆の出版事情のため遂に陽の目

を見なかつたとのことである。大体著者の仕事は資料の紹介や実証的な研究が主になつてをり、従つて後進としては等閑に出来ない、注意すべき論文が多いのであるが、然しそれらは専門研究誌のみならず数多の俳句雑誌に発表されてゐて、一読しようとするにも容易ではなく、多くの不便を感じざるを得なかつた。従つて論文集の刊行が待たれたのであるが、それが今かうして主な論文のみではあるが、一書に纏められたのであるから、どれほど後進にとつて便利で有難いことかわからないと思ふ。

さて本書は『芭蕉研究』と題されてゐるが、所謂芭蕉の芸術全般に亙る概説風なものではない。著者がその自序に「その各問題点をとりあげて重点的に考察を加えてゆく方法をとつた」と述べてゐられるごとく、問題の点を主とした芭蕉の作品研究であり、各方面に亙る芭蕉の作品を重点的にとりあげ、著者の本領とする綿密正確な資料の操作によつて、徹底的な考察を加へたものであるが、著者のすぐれた文学的センスによつて、実証的な研究がともすれば陥りが

ちな無味乾燥さから救はれ、芭蕉の詩精神に的確に迫り得てゐるものもある。

次に本書の内容について述べよう。先づ第一章「芭蕉の発句」では、一は俳諧の発句における季の問題について、芭蕉を中心として史的に考察を加へられたもの。今日ホトトギス派では季語は不可缺のものとなされてゐるが、芭蕉時代はさにあらず、寧ろ芭蕉は季題に対しては常識的に考へられるよりも、更に関心の薄い態度を示してゐたのであり、それは結局彼には発句の他に人事自然を自由自在に詠ひ得る連句の世界があつたことと、更には季題と云ふ既定の尺度に捉へられず、対象の本質を自らの眼で直接に見つめ、確めようとする芭蕉一流の詩作の方法があつた為だと述べられ、そして芭蕉以後季題が急激に増加し細密化していつたのは、連句中心の時代から連句発句並立時代、更に発句時代への移行と関係があり、題詠と云ふ句作法が一般化したことが、季題の増加發達をもたらし、やがてこの安易な句作法が、あの芭蕉の厳しい詩精神を、職人の手垢で汚すことになつたのであると論じてゐられる。二では芭蕉の「あかあかと日はつれなくも」の句をとりあげて、芭蕉発句の成立過程の一つの型を文獻の上から詳細に考証されたもの。「ほそ道」にこの句は「途中吟」と前書して金沢の後に出てゐるので、金沢から小松へ赴く途中詠まれたものだと言ふ誤解を生んでゐた。志田博士はそれを否定して俱利伽羅峠を越えて金沢近くで詠まれたものとされたが、それを著者は更に曾良の「奥の細道随行日記」やこの句の真蹟詞書から新潟県から富山県にかけての海岸(富山県は海岸滑川あたり)での嘯目述懐とされ、それが金沢への途中一句に結晶され、そして金沢の

俳席で發表されたものと推定された。この論証はその後「蘆扇録」の発見によつて確定的となつた。(これについては著者がP50以下に加筆説明してゐられる通りである。)然もこの芭蕉の発句の制作過程は、そのまゝ、他の句一たとへば荒海やなどの句の場合にも当てはまるものであり、興味深い論である。三では「うき我を淋しうせよ」の句をとりあげ、この句の初案の出来た時の心境から決定稿に至る芭蕉の心理を追求し、芭蕉発句特有のあの重鬱感とも云ふべきものが、一体どこから生じてゐるのかと云ふことについて考察を加へ、そしてそこに芭蕉の全人格、全人生の裏打を見てゐられる。

第二章「芭蕉の連句」に於いては、一は芭蕉連句のあらましを概説風に述べ、二では芭蕉が既成の文学伝統に如何に対決したかと云ふ興味ある問題を、特に連句に於ける恋と旅の句の扱ひを主として考察されたもの。先づ式目一般に對する芭蕉の態度を考へ、次いで恋と旅の句について論じ、芭蕉は恋は一句で捨ててよいと云ひ、旅も従来三句つゞきであつたものを二句にてするがよいと云つてゐるが、然し之は決して恋や旅の句を軽んずるからではないので、寧ろ恋や旅の真情を却つて重んじ、それに囚はれることを嫌ひ何れも恋や旅の句の出ることを希つたところにかうした言葉をついた芭蕉の真意があつたのであると述べてゐられる。

第三章「芭蕉の紀行」では「奥の細道」伝本考として、「ほそ道」の伝本を資料を博搜して追究してゐられるが、野坡に伝來した「ほそ道」真蹟の行方の追求と、本間製史の「葎菫抄」の書入による越後路のことを詳しく記してあると云ふ草稿本についての論及、更に去來本系統の校異、曾良本「ほそ道」の紹介などは著者が

特に力を注がれたところであらう。なほ去来本系統の彌本本、村治本と素竜本（著者によると、所謂素竜清書本ではなく、元禄十五年刊の井筒屋本である）の校異を示してゐるところであるが、既に頼原博士によつて西村家蔵の素竜清書本が紹介されてゐるのであるから、素竜清書本と去来本との關係についても今少し著者の説明が欲しいと思ふ。何故なら去来本は素竜清書本を筆写したものであるから、素竜清書本が出現した今日では去来本系統による「ほそ道」本文批評の仕事は殆ど問題にならなくなつたのではないかと思はれるのである。それにこの校異も井筒屋本でなく素竜清書本（戸川本の校異は素竜清書本によつて示してゐられる）によつて頂きたかつた。但しこゝは「芭蕉研究」（一輯）に発表された論文を生かされた為かうした事になつたものと考へられる。二は著者が入手された

曾良自筆「奥の細道随行日記」の解説であるが、最初に文献の上で「随行日記」の存在を追求し、それらに紹介されてゐる資料の正確さの度合について原本によつて吟味されてゐる。三は新発見の曾良本「ほそ道」の紹介と、素竜清書本との校異、そしてその異同の部分をとりあげて、それらが如何なる理由によつてなされたものであるかを問題にされ、そこに芭蕉の制作過程を考察されたもの。四は曾良本「ほそ道」と「随行日記」を主なる資料として「ほそ道」の中から最も有名な平泉前後の箇所をとりあげ、多くの資料を博引旁証しつつ、芭蕉の「ほそ道」の制作心理を考究されたもの。芭蕉の制作心理に本格的に取り組んだものとして著者の最も力のこもつたものである。

第四章「芭蕉の句合」は、一は芭蕉の処女著作である「貝おほ

ひ」の史的地位を明らかにするために、近世初期から享保期迄の多くの句合を蒐集整理したものであり、それらの内容を検討し乍ら「貝おほひ」の異質の新しさを実証してゐられる。なほ例によつてこゝには著者によつて明らかにされた立圃の花月十八番句合(口)や十二支句合、重頼の四十番句合等々多くの新出句合が紹介されてゐる。二は「貝おほひ」について形式内容の両面から考察を加へられたもの。これらの研究によつて句合史上に於ける「貝おほひ」の位置が正しく設定されたと云つても過言ではなからう。

第五章「芭蕉の俳論」では、一に於いて俳論史の概略と蕉風俳論の位置について述べられ、二では宝永元年五月廿七日付半残土芥宛去来書簡を紹介され、それ迄偽書視するものもあつた「去来抄」の確実性と、その執筆の年時について推定されたものである。

第六章「蕉風の伝播」は、一に於いて蕉風の地方伝播の一例を、中国美作の久世を中心として考察されたもの。そして二では更に広籠の九州全域に亘つて、敏速な蕉風の地方化の様相を資料を博搜してこくめに跡付けられたものである。

以上ごくあらましに本書の内容について紹介してみた。菲才のため意を尽さないところも多いが、要は本書の特徴は既にふれたごとく豊富な新資料の紹介と、それらの正確な資料の上に立つて、詳細緻密な考証を加へ、芭蕉の文学精神を正しく科学的に解明しようとしたところにあり、さうした点に多くのすぐれた成果をあげてゐられて、かゝる意味で本書が昭和期を代表する芭蕉研究書であることは疑ひない。なほ著者は序文に「私もここに、一応の区切りをつけて、次の研究領域への邁進の覚悟を、今日新たにするのである。」

と述べておられるが、今再び本書を一読して、天が著者に命をかすこと余りに短かかつたことが残念でならない。

最後に筆者が気付いた点二、三を付言することにする。十六頁に『留良書留』として「入かゝる日も」の句を、中七の下五字のない未完の姿で記録されてゐるとしてあげてゐられるが、これなど岩波文庫の著者の『ほそ道』所収の書留には「糸遊の名残哉」とあり、更にそれを見せ消ちして「程々に春のくれ」と記してあるとの事であるから、著者が所蔵してゐられた『随行日記』原本によつて記して頂きたかつたと思ふ。次に七十頁のひゞきの用例の「夜明の雉子は山か麓か、五む十し何ならはしの春の風」の出典を著者は元文五年刊『安津美山』としてあげられ、この集を紹介してゐられるが、この紹介の文によると実は『安津美山』と云ふのは、元禄五年刊不玉撰『継尾集』下巻と全く内容が同一である。恐らく『継尾集』の後刷改題本が『安津美山』だと考へられるのである。勿論「夜明の雉子」の付合も『継尾集』に見える。従つてこの出典としては『安津美山』より元禄五年の『継尾集』をあげるべきだと思ふ。次に百十三頁「元禄七年六月ごろ、伊賀の木白が江戸に出ていて当時上方にあつた芭蕉への手紙の中に：」とあるが、これは『俳人真蹟全集』四巻に収められてゐる手紙であり、既に頼原博士が指摘してゐられるごとく、(『芭蕉・去来』P.90)木白と云ふのは桃隣の桃の字の誤謬である。従つてこれは桃隣と改めるべきだと思ふ。以上倉卒の間に筆を執つたもので、この高著に対して云ひ足りない点が多くありはしないかをあやぶみ、又先師に対して失礼がありはしないかを恐れ乍ら筆をおく。なほ筆者が気付いた誤植を次に指摘しておく。

281	頁5行	風呂敷ヲシテ待↓待。
307	“ 6 “	こゝもはやていく日ぞ。蜚風↓こゝもはやなれていく日 の蜚風。
438	“ 13 “	岡本仁意胤及び以下↓岡本仁意、胤及以下。
453	“ 10 “	君か手もましろ。成へし↓君か手もましろ。成へし。
453	“ 18 “	雲霜を↓雪霜を。
464	“ 7 “	長崎りん女↓長野りん女。
470	“ 7 “	努風↓怒風。
470	“ 11 “	武田里仙↓武内里仙。
485	“ 4 “	武田里仙↓武内里仙。

(以上)